

もつ資源の採取利用を基調とする経済体系」を有する山村のプロトタイプを構成し、その変容のプロセスとして山村を把握した上で分析を加え、さらにその基層を掘り起こして東アジアの基層文化の流れの中に位置付けようという壮大な構想を有する。非稲作・焼畑を基調とした山村が水田稲作の導入ないし米の購入に転じるプロセスもまた、この文脈の中で検討されている。

本書は、タイトルにも明確に表現されているように、「文化地理学的研究」の書であって、歴史地理学的であるかどうかという意識が著者にあったとは思われないし、またその必要もない。ただし、本書の紹介が本誌にとって意味があるとすれば、本書の山村文化の把握が極めて動的であることであり、歴史地理学的にみても大きな成果とみられる点である。もちろん、さまざまな調査によって知り得る山村の実情のすべてを、プロトタイプからの変容、ないし典型的山村文化の崩壊のプロセスに位置付ける手法が、歴史地理学的に常に有意義であるとはいえない。しかし、本書が雑弁に物語っているように、極めて有効な視角である。

本書を通読して感じたことを一、二付言しておきたい。一つは、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ編の構成が本書の目的にとって最上であったのかどうか、という点である。例えば、第Ⅱ編の内容のあとに、第Ⅰ編の内容が展開される方が（この場合にはおそらく第Ⅱ編の内容の一部が第Ⅰ編の内容の後にくることになる）、紹介者には理解が容易であるように思えた。

また、全くの末節に属することであるが、用語の表記法も、カタカナとアルファベットが並記されているのが目立つ章、カタカナだけの章、アルファベットだけの章などがあって、再版の折には統一していただけると有難い。

以上、この方面の研究には全く不案内な紹介者が、皮相なことを述べたに過ぎず、本書の全貌を紹介しきれていないことを御許しいただきたい。

いずれにしろ、本書によって文化地理学は新たに一つの豊かな内容を得たことになる。

(金田章裕)

Parker, G.: Western Geopolitical Thought in the Twentieth Century (『今世紀欧米における地政学思想』), 199 p., 1985, Croom Helm, £19. 95.

周知のように、19世紀末から20世紀にかけて欧米および日本で地理学が専門職業化するに当たっては、ナショナリズムないし植民地主義の風潮が大きく関わっていた。その意味では、地政学は近代地理学の一つの極限形態といえる。したがってそれを分析することは、地理学史学において格別の意義を有するはずである。これは直接の地政学批判とは別次元の問題であり、地理学や全体社会にとって地政学がいかなる存在であったかについて広い視野から位置づけるような接近法が必要であろう。著者がいかなる問題意識に基づいてこの研究を行ったかは記されていない。しかし、広汎な「地政学的」見解を陳列し社会的な文脈との相互の影響を跡付けようとした本書は、上記のような接近法に対しても一つの礎石となるであろう。

著者は、政治地理学・地政学を次のように性格づける。すなわち政治地理学は、政治的・国際的権力（以下では‘power’を「権力」と訳す）を、世界の物理的性格に堅く根ざしたものとして研究する。地政学は、かかる権力の国際的舞台を、空間的視点から、地球を全体として理解することを試みる学問である。その構成要素（国家など）を検討することもあるが、それはあくまで全体を理解するためであり、要素の結合によって生まれる全体的パターンと構造とが地政学的研究の主関心をなす（したがって地政学と政治地理学との関係は、全地球的気象システムを理解しようとする気候学と気象学との関係に相似的といえる）。

以上の定義から当然に、地政学は、欧米列強が植民地を拡大したことによって世界が有限の閉鎖システムとなり、その結果地球が一つの全体として認識されうようになった19世紀末以降の存在である。そのとき以来、地政学は国際政治の状況の変化に応じて変化してきた。本書では、このような流れの中における様々な地政学思想を時代順・地域別に検討し、また、これらの思想が現実の政治にどの様に影響したかについても論ずる。

本書の構成は以下の通りである。

第1章：序

第2章：20世紀地政学思想の根

第3章：Mackinder とその世界論

第4章：Mackinder の理論以後の世界論

第5章：ドイツ地政学とその先駆者

第6章：第二次大戦以前のフランス地政学思想

第7章：北米における地政学思想の発展

第8章：Heartland 再論：戦後の新展望

第9章：1960年代・1970年代の地政学

第10章：現代の急進的代替案

第11章：結論

付 録：地政学用語解説

第2章では、19世紀後半の思想的・社会的状況と、その中で生まれた Ratzel の政治地理学とを紹介する。第3章では、独仏での議論にもふれているが、主に英国の論者を取り上げる。戦後を扱った第8章以降では米国での議論が中心をなす。

つねに変化してきた今世紀欧米の地政学に対して、著者は方法的・内容的に次のような共通点を認める。まず方法では、閉じた有限の実体としての世界という観点を基礎としていること、分割された世界（紛争の可能性のある不安定な世界）を対象とすること、通時的分析を行うこと、特定国家の利益のための処方であることが多いこと、など。一方、内容においては、闘争の感覚、二分論的な見方、特定国のための覇権モデル、などの特徴が大半の思想に共通である。この紛争・闘争への志向は社会 Darwinism から受けている（ただし、それが含意していた変化＝進歩という信念は、第一次大戦後のヨーロッパの没落のなかで希薄になった）。また国家有機体説や環境決定論も、同じ生物学とのアナロジーにより導入された。しかし、これらも今世紀前半に、次第に脱落ないしは緩和されていく。

さらに著者は、これらの思想を内容により六つの世界観に分類する——二分論的・縁辺的・帯状・多元的・理想主義的・中心／周辺の。この6者はいつの時代にも見られるが、一つの時代には或るものが他のものよりも流行する。すなわち、第一次大戦までは二分論、戦間期は縁辺ないし帯状論、戦後は主に二分論もしくは多元論、である。これらの世界観はそれぞれに、世紀初頭は社会有機体論、戦間期は可能論、戦後はシステム論（計量革命・モデル志向は地政学では周辺の）、70年代は人文主義、というパラダイムによって支えられている。

なお、現実の政治に対するそれぞれの地政学思想の影響に関する著者の判断をまとめると、地政学が真に有効に作用しえたのは第二次大戦中から戦後にかけての米国においてのみ、ということになる。

本書の難点としては、次の7点を指摘することができる。

1. 近代科学としての基盤（大学における席や専門学会など）が脆弱な地政学の場合、地政学者として identify している者を基準として地政学を定義することは、必ずしも有効でない。したがって、政治学や政治地理学との関係においてこれを如何に定義するかは、目的によって変化せざるをえない。著者の定義は一面では、自称の地政学者のみならずその他の論者の議論をも含むうるほどに広いものであり、その限りで利点を有する。しかし他方、国際政治の全地球的な空間的パターンの研究に限定することで、地政学に含まれるべき自余の議論（局地的現象それ自体の研究）が不当に排除されてしまう。むしろ「全地球的」という限定を捨て、たとえば「権力の空間的な位置関係を主たる変数としてその対外的行動を説明・指示する研究」とでも定義した方がよいのではなからうか。

また、「地政学／政治地理学」と「気候学／気象学」という著者のアナロジーは、いささか奇妙に見える。「地政学／政治地理学／政治学」と「気候区分／気候学／気象学」との対比の方が、著者の意図に近いように思われる。

2. 著者は地政学の環境論的色彩を強調する。これは次で触れる「環境」の定義と関わる問題ではあるが、全体としての地球像のみを問題とすることも関係するであろう（なぜならば、uniqueness である地球は自然的要素によって絶対的に特徴づけられているからである）。しかしその反面では、より抽象的な空間的關係論の側面が軽視されているように思われる。たとえば Mackinder の歴史的分析¹⁾に端的に現れているように、局地的なものから全地球的なものにいたる規模の違う諸現象を、その幾何学的（空間的）特徴の類似性のゆえに類推的に解釈するということは、地政学の特徴の一つではなからうか。

さらに著者が環境論的なものと見なしている議論の中には、必ずしもそう解釈する必要のないものがある。たとえば Mackinder の Heartland 論では、海・陸は権力自体の源泉としてではなく、むしろ権力行使の手段として考えられている²⁾。したがって彼の Heartland は、環境論の問題としてではなく、交通手段という技術論か交通網という幾何学的問題として解釈できるであろう。

3. 著者は、地政学思想の大半を環境決定論として特徴づける。しかし、決定論と自由意志論との対

比にひきずられて、その「環境」には、自然環境のみならず国際的環境（＝相対位置）なども明瞭な区別のないまま含まれている（たとえば pp. 41-42, 115-116, 174）。「環境決定論」をこの様に使うことは、時に便利ではあるものの、地理学思想史においては誤解の余地がある。空間的相対位置＝立地の問題が1920～30年代の米国において反環境論の一つの根拠であったことから、この点は無視しえない。

4. 著者は各々の時代の地政学思想をその社会的背景の中に位置づけようとしており、また各思想が実際の政治にいかなる影響を与えたかにも触れている。しかし、それらは簡単な状況証拠の提示に留まり、厳密な証明をなしていない。政治に対する影響という問題は、政治家自身が自己の地政学思想を發展させた場合もあるので、本書のような形の議論でもあるいは十分であろう。しかし文脈における位置付けという問題は、単なる着想の平行性を指摘するだけでは足りない。各論者の思想的準拠集団を確定し、それとの関係で文脈の影響を跡付ける必要がある。

5. 著者は理論・テーマの変化の原因としては、対象もしくは価値観（実践上の目標）の変化だけを考へて、理論内部での発達・転換という要因は無視ないし軽視しているようである（pp. 179-181）。そのためであろうか、一つのテーマにおける議論の展開ないしは發展（換言すれば異見間の関連付け）が明確でなく、多くの議論は単に羅列されているに過ぎない。「地政学界」という共通の議論の場が欠如もしくは脆弱である以上、種々の見解の交流可能性を安直に前提することは不適切ではある。しかしそれだけにかえて、どのような形で交流が行われているかを明らかにせねばなるまい。

6. 先に紹介した地政学の分類は、空間的（形態的）基準と非空間的基準とが混用されているために、有効な枠組みをなしていない。著者の見方を基本的に踏襲するとしても、形態（円弧・円環・不定形）と極の数（二極・多極）との2基準によって6類型を区分する方が適切であろう。この場合、中心／周辺論（二極）と多極理論（多極）とは「不定形」に属する。著者自身はこの範疇を立てていないのでその考へを知る由もないが、国際政治の全地球的パターンが不定形である（すなわち、明確な空間的構造を示さない）ということは、（著者の定義する）地政学の存立基盤が崩壊したことを意味するのではなか

ろうか。

7. 末尾の用語解説には、56語（そのうち独語28、英語22、仏語3、その他3）が収められている。便利ではあるが、「電撃戦」、'ecumene'、'pays'などの語まで含むのは不適切であろう。

〔注〕

- 1) マッキンダー、H. J.（曾村保信訳）『デモクラシーの理想と現実』原書房、1985、第3章。
- 2) 上掲1)第4章、およびマッキンダー、H. J.（曾村保信訳）「地理学からみた歴史の回転軸」上掲書所収、pp. 251～284。

（立岡裕士）

菊池万雄編 近世都市の社会史

名著出版 1987年3月

A5判 326ページ 2,500円

近年、歴史学の分野において、アナル学派の影響を承けた「社会史」の諸研究が、隆盛となっている。本書のタイトルに明示されている「社会史」は、その研究視座とは異なっている。この意味でも、アナル学派の「社会史」との関連について、まえがきにおいて若干みられるものの、歴史地理学における「社会史」の研究視点などに関して詳細な論述の必要性を、本書への要望としてまず第一に指摘しておきたい。

さて、本書の構成は次のとおりである。

第1章：歴史が語る都市

- 第1節 歴史が語る都市—解題
- 第2節 歴史が語る都市—考証
- 第3節 歴史が語る都市—残照

第2章：災害と近世都市

- 第1節 明暦の大火と江戸の開港
- 第2節 飢饉と救恤—仙台藩を例として
- 第3節 津波に洗われた島原の町

第3章：現代に生きる近世都市

- 第1節 都市生活と環境
- 第2節 近世都市から現代都市へ

第4章：統計が語る都市生活

- 第1節 人口動態
- 第2節 生産と消費
- 第3節 流通

補章：古文書解説

第1章の「歴史が語る都市」は、解題・考証・残